

地名散歩

30

名嘉山 兼 宏

与那城 (ヨナグスク)

めまぐるしい変遷

与那城は、勝連半島のほぼ中央部金武湾を見下ろすところに位置する。『南島風土記』（東恩納寛惇）によれば、「古へ、尤那須（尚徳代）、尤那是古（尚眞代）、・・・でユナシクと発聲された」とあり、『おもろさうし』では「よなくすく」と出ている。『琉球国由来記』には、村の祭祀の時には池味大屋子が殿に酒・肴など供物をささげるとある。

与那城は、当初勝連間切に属していたが一六七六年の勝連間切りの分割によって西原間切与那城村、同年平田間切与那城村、まもなく与那城間切与那城村、明治期中頭間切に、そして中頭郡与那城村字与那城、現在は平成17年の二市二町の合併により、うるま市与那城字与那城とその変遷はめまぐるしい。

ピーグは、現在でも照間で栽培

されているが、以前は隣村であるこの与那城でも栽培し、ピーグの産地として知られていた。現在は主にサトウキビや野菜などが栽培されている。

「二才が美らさや与那城」と謡われ、かつては与那城の青年たちは、近隣の美童たちのあこがれだったという。現在でも青年たちを見るとその雰囲気がある。これは単に容姿だけでなく、日常の生活、立ち居振る舞いもふくめて表現したものとされる。

戦後は、与那城三叉路を基点に半島の交通の要地となり、屋慶名や平敷屋と結び、とくに十号線沿いにはホワイトビーチからの米兵を相手にするバー、キャバレー、飲食店などが建ち並び賑わいを見せた。最近では街路のネオンサインも少なくなり、往時の風景は見られず、大型の商店が目立つようになった。

ヨナ・ヨネ系地名を探る

西原町の与那城は、与那城をはじめ兼久や我謝などと海岸地名が続き、かつては与那覇浜と呼ばれる白い砂浜が海岸沿いに広がっていたという。

本部町渡久地に小字与那城がある。『本部ナークニー』の第三節「遊でいウフタ浜」戻る[●]与那城[●] 暁の

渡い「港渡い」とあるように、やはり海岸の砂地に位置する。

国頭村の与那は、与那川が西海岸に流れる河口の推積地周辺に位置する。

豊見城市の与根は、ユニマースの産地として知られるように、海岸に位置している。

南風原町の与那覇は、國場川の上流域にあって「おもる時代にはこの地域まで海が入りこんでいた」という（『角川・日本地名辞典・沖縄県』）。

また、宮古島市（旧下地町）の与那覇や竹富町の与那田橋もやはり海岸や河口の砂地地帯に位置している。

さらに東風平町の世那城（与那城）は八重瀬岳の北、報得川の中流域の推積地に立地、うるま市内の小字与那田原や世那川原もそれぞれ推積地に立地している。

この県内の小字を含めたヨナ・ヨネの地名は海岸に立地した砂地のところや川の流域にあって、土砂の推積によって形成されたところに名称されている。

このことからヨナ・ヨネは海岸や沖積地にあって「砂地」を意味する。

与那城の地名の意味

勝連グスクを中心に西原や南風

原と方位・方向を示す地名があるように与那城は、勝連グスクから金武湾に面する方向に位置する。その海岸は干潮時には広大な砂州が広がる。つまり、ヨナの広がる方向に位置し、グスク（城）は、場所・集落を意味する美称と考えられ、その意味は「ユナ（砂州）の方向にあるところのグスク（村）」という意味に推察される。

なお、与那城の地名について『沖縄県の地名・平凡社』には「地名は金武湾のユナ・ユニ（州）を見下ろすグスクの意と思われる」とあり、また「与那原町の与那原の地名は、本島南部の東海岸、中城湾に面している。地名は、海岸の砂原を意味する方言のヨナ、あるいはユナによる」とある。

クニシリヤー

与那城公民館の後方、アシビナー（児童公園）の一角に「クニシリヤー」が祀られている。このクニシリヤーから与那城の村が始まったの伝えがあるが、これはクニ（ムラ）を治（し）る、領（し）るの古語（しるしめす）で、ムラを統治する人（ヤー）のことと思われる。

また、いい伝えでは与那城は勝連按司の子孫で、字の後方に按司墓もあるという（『よなくすくの民話』）。